



発行にあたって

一般社団法人日本病院前救急救命学会理事長
脇田 佳典



このたび、一般社団法人日本病院前救急救命学会準機関誌『救急救命士ジャーナル』が発刊できたことを会員の皆さまとともにお祝いいたしますと同時に、これまでご支援をいただきました多くの皆さま方に厚く御礼申し上げます。

日本病院前救急救命学会は平成 26（2014）年 4 月 1 日に任意団体として全国の有志により設立され、平成 28（2016）年 6 月 13 日に一般社団法人となり約 5 年が経過しています。

平成 3（1991）年に救急救命士制度発足後 30 年が経過するなかで、時代の変遷に伴い特定行為の拡大やメディカルコントロール体制の整備などのさまざまな改革が実施され、救急救命士を中心として病院前救急医療体制の充実が図られてきました。今後、さらに職域拡大されることで病院内においても入院前の段階からさまざまな職種がかかわる医療チームの一員として救急救命士に求められる業務内容や責任は、さらに重くなっています。

私たち救急救命士は、自己研鑽を重ね、専門職としての自覚をもち、技術・知識を高め、医療にかかわるプロフェッショナルとなり、病院前救急現場活動の事後検証や研究を通じ活動根拠の確立を目指し、救急現場学を確立しなければなりません。その一助となるために『救急救命士ジャーナル』が発刊できたことは、感極まる思いです。

この『救急救命士ジャーナル』を刊行することで、日本全国の救急救命士が参加し、まだまだ手がつけられていない病院前救急現場の課題を持ち寄り、議論を交わし、研究を生み、会員個々の技能を引き出すことで論文などを完成させ、その成果を活動根拠として蓄積するものと考えます。そしてそのときこそ救急救命士の自律が他の医療職の皆さまから認められるときかと思います。

道半ばではございますが、まずは今回の『救急救命士ジャーナル』の発刊をお祝いし、次へのステップに進みたいと思います。どうか引き続き会員をはじめ消防機関の皆さま、関係者の皆さまより日本病院前救急救命学会へのご支援・ご指導をお願いし、この『救急救命士ジャーナル』が多くの医療職の皆さまの目に留まることを願いご挨拶とさせていただきます。



発行にあたって；初代理事長より

一般社団法人日本病院前救急救命学会初代理事長
北九州市職員
坂田 武



救急救命士のための学術雑誌『救急救命士ジャーナル』の創刊を心よりお祝い申し上げます。

また、平成3年の「救急救命士法」施行から30年という節目を迎える年に「一般社団法人日本病院前救急救命学会」の準機関誌として位置づけられ発行されることは大変意義深く、学会立ち上げに携わった理事長として喜んでおります。

発行にご尽力されました株式会社へるす出版の佐藤枢代表取締役社長ならびに学会役員の皆さまに深く敬意を表します。

さて、本学会は「救急現場学の構築」という命題を追求すべく、救急救命士の有資格者としての自覚と自律、活動根拠の構築、資格を活かした社会貢献を設立目的に掲げ、平成26年4月1日に発会しました。そしてこの目的を達成するためには、学会の社会的信用を向上させ市民権を得る必要があると考え、各種委員会の設置と合わせて、次の3つを重点事業として組織づくりを行いました。1つ目は事務局の設置、2つ目は法人格の取得、3つ目は機関誌・学術誌の発行です。

幸いにして、事務局は平成29年2月1日に株式会社へるす出版に設置し、法人格の取得は平成29年6月13日に一般社団法人として登記することができました。

しかし、残念ながら私は、3つ目の機関誌・学術誌の発行を待たずして、令和元年5月の通常総会を最後に理事長を退任した次第です。

その後、昨年から新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、わが国でも多数の感染者が発生し、社会生活にさまざまな影響が出て暗い影を落とすなか、今回の発行の知らせを耳にしました。ちょうど厳寒が去り、フキノトウが表土を突き破り、芽を出す時期でもあり、春の到来を実感するとともに、瞳若たる思いをその知らせに抱きました。

改めていうまでもなく本学会は、病院前救急医療体制における傷病者の発生現場から病院までの活動における臨床統計の検証などを用いた、救急救命士による学問「救急現場学」の構築を目的としています。

この実現には、今後「臨床の場」「教育の場」「研究の場」など多様性を示すことが予想される救急救命士の活動環境について、職域や知識・経験の異なる救急救命士が同じテーブルを囲み、さまざまな経験を活かし意見をぶつけ合い、研究計画を討議する場や環境を整える必要があります。本学会が年1回開催する学術集会やWeb会議がその場であるように、機関誌も学会と会員を結ぶ重要な窓口の一つです。

紙媒体として重みのある当ジャーナルが、会員と学会運営側との接点となり、会員の研究・実践成果の発表の場として、また情報入手の手段として活用され、さらには社会に対する提言を広く発信する場として認知され、社会問題解決の一助となるよう期待しております。

結びに、『救急救命士ジャーナル』が「救急現場学」分野の“トップ・ジャーナル”へと発展されますとともに、関係する皆さま方のご健勝とご多幸を衷心よりご祈念申し上げ、発行にあたってのお祝いの言葉とさせていただきます。

『救急救命士ジャーナル』と 救急救命士のこれから

喜熨斗智也¹⁾⁷⁾ 一柳 保²⁾⁷⁾ 木下 拓也³⁾⁷⁾ 津波古 憲⁴⁾⁷⁾ 原 貴大⁵⁾⁷⁾
山内 一⁶⁾⁷⁾ **司会** 脇田 佳典⁸⁾

1) 国士舘大学大学院救急システム研究科准教授, 2) 高野町消防本部, 3) 東海市消防本部, 4) 国士舘大学体育学部スポーツ医科学科講師, 5) 明治国際医療大学保健医療学部救急救命学科講師, 6) 新潟医療福祉大学医療技術学部救急救命学科講師, 7) 『救急救命士ジャーナル』編集委員会, 8) 日本病院前救急救命学会理事長

脇田 (司会) こんにちは。日本病院前救急救命学会理事長の脇田佳典です。和歌山県消防学校で校長をしております。今回はこの『救急救命士ジャーナル』を将来的にどういった雑誌にしていきたいのか、本誌編集委員にお集まりいただきました。

まずはこの『救急救命士ジャーナル』に対する想いも添えて自己紹介をちょっといただけたらなと思っております。では、まずは編集委員長の喜熨斗さんからいきましょうか。

喜熨斗 はい。よろしくお願いします。国士舘大学の喜熨斗智也と申します。私は、国士舘大学のスポーツ医科学科を2期生で卒業し、救急救命士の資格を取得しました。その後は大学院に2年間行きまして、大学院の助手や職員を経て、今教員をしております。

これまで救急救命士がメインとして、企画もして編集委員会も立ち上げて作っていく雑誌はなかったのではないかなと思います。本誌がその第一歩として、今後の救急救命士のベースを作っていく非常に重要な雑誌になると思っています。とくに研究や論文発表は、病院前救急救命学を進展させていくために絶対に必要なことですし、そういったものが当たり前になっていくベースになっていってほしいかなと思います。日本の救急救命士が世界のトップクラスと認められるために絶対必要な過程だと思いますので、編集委員長として頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

脇田 ありがとうございます。続いて、津波古さん、いいですか。

津波古 ありがとうございます。津波古憲と申します。2018年4月から2021年3月まで国士舘大学防災・救急救助総合研究所というところで4月からは同大学体育学部スポーツ医科学科で教員として勤務をいたします。国士舘大学で救急救命士の資格を取得しまして、大学院にそのまま

行かせていただいて、川崎市消防局に10年勤務をした後、現職に就いています。

この『救急救命士ジャーナル』についての思いですが、今、救急救命士向けの書籍などは多数出版されていますが、現場の声を反映した内容は少ないと感じました。

研究については、論文を書くというところについてまず理解を得ることにすごく苦労したところもありましたので、そういったものが当たり前になるような雑誌にしたいと思います。

脇田 ありがとうございます。それでは、次に山内さん、お願いしていいですか。

山内 山内一です、よろしくお願いします。私は、元々は航空自衛隊に在籍して、入隊してから一貫して衛生という医療部門にいました。その間に4年ほど、特殊救急以外のスタンダードな救急を勉強したいと考え、熊谷市消防本部に出向させていただき、いわゆる街の救急を勉強させていただきました。航空自衛隊の最終部隊は、部隊創設から携わらせていただいた航空機動衛生隊です。退職後、もう一度しっかりと勉強し直そうと考え、国士舘大学大学院に進学しました。その後、救急救命士の生涯教育をもっと実のあるものにしたいと考え、臨床をベースにした教育を構築すべく、埼玉医科大学総合医療センターに入職し地域の方々と一緒に救急救命士の新しい教育の形を作ることに挑戦しました。運用レベルまで到達し一段落ついたところ、新潟医療福祉大学が救急救命学科を開設するというご声掛けをいただき現在に至ります。

これまで救急救命士の教育は、医師におんぶに抱っこな部分がすごく多かったと思っています。医療職種の間では、ある意味一番独り立ちが遅いとも思います。決して排他的な意味ではないのですが、他職種に頼ることなく救急救命士自身が教育や研究をできるというのがこれから到達しなければいけないところだと考えています。その点で



喜熨斗智也 氏

は、われわれのこの学会および準機関誌の作成というのは、すごく大きな第一歩であり重要な立ち位置だと認識しております。誠心誠意頑張っていこうと思っております。よろしくお願いいたします。

脇田 続いて、原さん、お願いしていいですか。

原 はい。よろしくお願いいたします。原貴大と申します。僕自身、国士舘大学で4年間課程で救急救命士の資格を取りまして、そのまま修士課程、博士課程に進学をして、博士を終わった後そのまま研究科の助手をさせていただいており、4月からは明治国際医療大学で勤務いたします。当学会が立ち上がったときはまだ博士の学生だったかとは思いますが、最初の会に出たときのことをよく覚えておりまして、いよいよ救急救命士が研究をする、また、救急救命士が主管となって動く学会が立ち上がるぞ、というものをすごく期待をもって参加したときのことを覚えています。

まだでも、やっぱり今思い出すと、そのときは先輩方の動きに乗っかろうとか動かしてもらおうという気持ちが強かったのですが、今このようにして編集委員の末端に入れていただきまして、実際に活動ムーブメントを起こす側に入れさせていただいていることを非常に光栄に思いますし、そういったところで働けることに本当に感謝をしておりますので、皆さま、何とぞよろしくお願いいたします。

脇田 一柳さん、続いてお願いします。

一柳 よろしく申し上げます。和歌山県の高野町消防本部の一柳保といいます。もうずっと消防職員として32年働いております。救急救命士の国家試験は、第13回だったのですかね。救急救命九州研修所を卒業しております。いろいろな経験を今までさせていただいて、常に探究心というものをもちながら救急救命士としての仕事をしております。いろいろな研究も病院の先生とかに頼りながら独自にやってきたんですけども、やっぱりこの学会がそういったところの懐になって、研究をしていきたい救急救命士の手助けになるような学会、その学会が発行する雑誌になっていくように努力していきたいと思っております。田舎の救急救命士ですが、大きな流れの中の渦にも入っていけるというところを全国の救急救命士に示したいと思っておりますので、皆さん、よろしくお願いいたします。

脇田 ありがとうございます。木下さん、よろしくお願いいたします。

木下 初めまして。よろしくお願いいたします。愛知県は東海市消防本部の木下拓也と申します。私自身は消防に

入って17年で、高校を卒業して、大学に行かずに消防に入っている人間です。実は救急救命士になっても年が浅く、まだ5年ほどしか経っていません。ずっと救急救命士を志望していて、ようやくここ5年ほどで救急救命士の活動をさせていただいています。

大学に行かずに何をやっていたかという、実は海外で、ザンビアとかで救助隊の教育にかかわらせていただいたりですか、あとはシアトルだったりアメリカで救急車に何度か乗りに行かせていただいたりとか、喜熨斗先生方もニューオーリンズかシカゴかどこかでお会いしていたのが僕は初めてだったかなと勝手に思っているんですね。

喜熨斗 そうでした？

木下 はい、そうだと思います。国士舘大学の方々がすごく海外の学会に大人数でいらっしやっていて、こういうことを研究されている救急救命士さんってこんなにいっぱいいるんだ、と思って驚いたのがその当時の印象でした。日本の救急隊だけではなくて、本当に途上国の底辺の部分の救急から、アメリカのパラメディックたちの活動までを見ているなかで、日本の救急救命士はその国の医療制度のなかで一体何ができるんだろう、世界のなかでどれぐらいのレベルで、この先どのように向かっていくのかな、そのようなことを思いながら東海市で救急車に乗っています。

私自身は臨床が7~8割で、JPTECなどでの教育が2~3割で、研究についてはほとんど見る専門で、発表はほぼゼロです。消防機関で働いている救急救命士、救急隊員はそのような方が圧倒的大多数だと個人的には思っています。そういった方々が『救急救命士ジャーナル』を活用して、臨床や教育の興味がある部分だけではなくて、研究という部分でもステップアップしていき、日本の救急救命士の発展につなげればなと考えております。

脇田 皆さんの話を聞いていると、当学会の目的である、まず自律するということ、それから専門職としてのものをもたないといけないということがひしひしと感じられています。

『救急救命士ジャーナル』のコンセプト

脇田 平成26年にこの学会が立ち上がり、その後、平成29年に一般社団法人になって、それで令和3年にやっと『救急救命士ジャーナル』が出ると。携わっていただいた皆さんも同じ思いかと思うんですけども、「やっと来たか」というふうなところがあって、それを編集委員の皆さんが今、形にさせていただいているところですが、この『救急救命士ジャーナル』がどのようなコンセプトで作られていくかというのを伺いたいと思うんですが。

津波古 今、救急救命士に興味がありそうな内容について

アンケート調査で聞いて、項目立てをしているのですが、私が『救急救命士ジャーナル』のコンセプトを一つあげるならば、救急救命士の現場の経験の伝承という部分ですね。

私は第1回日本病院前救急救命学会で、症例発表をしました。そこで発表症例に対して学会に参加した方から、いろいろな視点で意見をいただいたことが、その後の救急救命士としての現場活動にすごくプラスになったことをすごく覚えています。

皆さんもいろいろな先輩から現場で声を聞くとは思いますが、この『救急救命士ジャーナル』を読むことによって、自身が経験として得られていない部分をしっかりと学術的に学び、よりよい現場活動につなげてもらえればと思います。そうすることで救急救命士としての質も底上げのきっかけとなるという思いがあります。

脇田 ありがとうございます。原さん、どうですか。

原 論文を投稿して受け取る救急救命士のための雑誌ができたということはすごく大きいなと思っております。今まで日本臨床救急医学会以外、救急救命士の研究発表の場というのは、どこかの誰かのフィールドにお邪魔をするしかありませんでした。今回救急救命士たちが自分たちで立ち上げて、自分たちの学術をしっかりと述べて、今まで多くの方々がずっと合言葉的に言ってきた「救急現場学」をきちんと発信して、それに対するディスカッションをしっかりとできる媒体ができたという意味で、『救急救命士ジャーナル』を発行ができる体制が整ったというのはすごく重要です、コンセプトとして大きなところだと考えております。

脇田 ありがとうございます。消防に在籍する人からちょっとお話を伺ってみたいんですけども、一柳さんどうですか。

一柳 消防の救急救命士として今まで手に取って学習する雑誌は、どちらかというと、トピックスとして「こういう取り組みをやっています」という、エビデンス的にちょっと薄い内容のものが多かったと思うんです。しかし、これからは『救急救命士ジャーナル』が、正しい内容の記事を消防機関に提供できる媒体になるというのがすごく大きいことなのかなと思います。「現場学」という学問というのを定着させるためには、こういった媒体というのは絶対必要ですし、そういう性質のものにわれわれもしていかなければならないので、記事は厳選して、吟味したうえで提供していきたいと思っています。

脇田 木下さんはいかがですか。

木下 私自身はJPTEC協議会からの推薦で、今回の編集委員として加わっています。JPTEC協議会としてもガイドブックの発刊などを行っています。しかし、リアルタイムな

最新の情報などをなかなか提供しづらいというところがありますので、そういったところを補えるような形で、外傷に関する部分でホットピックスを継続的に提供できればと考えております。

脇田 ありがとうございます。

続いて山内さん、いろいろな職種を重ねてこられて、というところではいかがですか。

山内 おそらく、救急救命士業界で職務として全方向からものをみた方はそんなにいないと思いますが、私は特殊救急、軍事系から消防救急、病院、教育と多角的に「救急救命士」をみてきました。そのなかで私が一番打ちのめされたのが病院だったんです。正直「こんなに自分は無知だったのか」と。活字でしか知らなかったことが生の臨床として次々と目の前で展開されていき、本当に日々さまざまなものをみさせていただきました。「このままじゃいけない、一から勉強し直した」と、また振り出しに戻りました（泣）。そのようななか、搬送してきた救急救命士が、明らかな所見の見落としを医師に注意される場面があり、そのとき救急救命士が「いや、だって、現場では…」と、これまた言い訳にしか聞こえない返答をされたのです。

これ、おそらく全国でよくある光景ではないかと思います。「現場」という言葉を逃げ口上で使うのではなく、僕は「現場では…」ではなく「現場だからこそ！」にしたかったのです。それを成し得るためには、やはり学問の構築というのが不可欠だと考えています。

今、われわれがやろうとしていることはまさにこのことで、これを成し得る学術団体、準機関誌でありたいと考えています。

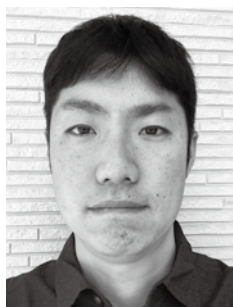
脇田 ありがとうございます。最後に編集委員長、いかがですか。

喜熨斗 ありがとうございます。この『救急救命士ジャーナル』のコンセプトですが、救急救命士が中心となって、救急救命士が編集をして、救急救命士が書く、自分たちの学問を探究する雑誌がまさにこの雑誌のコンセプトではないかなと思います。これまでこれほどの救急救命士が中心となって作り上げていくものというのはなかったと思いますので、自分たちの地位もそうですし、自律もそうですし、そこを作っていく土台になる雑誌にしたいと思っています。

今の私の研究のフィールドは、マラソン大会ですとかマスギャザリングの救護体制——MC体制をどう作っていくかというもののなのですが、初めて学会で発表してけちゃん



一柳 保氏



木下 拓也 氏

けちゃんにされて、座長からも否定をされて、それでもめげずにこういったものが必要だろうし、それで心肺停止になった方が助かることが増えていくだろうということを信じて同じ研究をずっと続けて、5年ぐらいうると、「いつも喜熨斗がやっていることだから」ということで否定はされなくなって、10年ぐ

らいたって周りを見てみると、全国のマラソン大会でモバイル AED 隊というものがまねをされて、それが実働されて、それが多くの人を助けていったという事実がでて、やっぱり物事を変えるためには続けることも大切だし、その理論を積み立てていくことも、重ねていくことも非常に重要なことなんだ、ということを経験を通して私は学んでいったんですね。

ほかの医療職種に納得してもらうためにはやはり理論が必要で、エビデンスが必要で、それを作り、表現・発表できる場がこの『救急救命士ジャーナル』であってほしいなと思っておりますので、救急救命士の自律のためにこの雑誌のコンセプトといいますか、そこを軸に作っていききたいというふうに思っています。

脇田 ありがとうございます。皆さん同じ方向を向いているんだということが認識ができました。

『救急救命士ジャーナル』一押しの企画

脇田 さて、座長というか、理事長としては、会員を増やさないといけないということで『救急救命士ジャーナル』のなかで「ここを読んでもらうときっと増えるぞ」と思えるようなところが、一人ひとりにきくとあると思いますので、ちょっとそこを教えていただけたらなと思うのですが、津波古さんからまたいきましょうか。

津波古 ありがとうございます。コンセプトのなかにも「学術的に」というところがありますので、読んで、「自分も学会で発表したい、論文を投稿してみたい」と思うような雑誌にしていけないと続いていけないのでは考えております。そこも踏まえて、「研究のスタートアップ」の記事であったり、あるいは「プレゼンテーションの仕方」であったりだとかですね。私は消防にいましたが、プレゼンテーションの仕方を指導できる人というのはごく一部でした。

私の場合は大学院を卒業したので、プレゼンテーションの仕方や研究の仕方を学んで消防に入ったのですが、消防でそういったことが継続してできたかという、救急業務

で忙しくまったくといっていいほどできなかったもので、研究の仕方を『救急救命士ジャーナル』を通して学んでいたのがよいかと思いました。自分の経験したものが学術的にエビデンスとして残って、その結果、全国の救急救命士や救急隊活動の質の向上へとつながっていくということを感じていただければ、おのずとこの『救急救命士ジャーナル』の意味というものもできてくると思います。そして「この『救急救命士ジャーナル』は、救急救命士として活動していくためには必須バイブルだよな」という形になってくるところを目指していきたいと考えています。

脇田 津波古さんは、研究スタートアップというところなんです。

津波古 そうです。やっぱり医師や看護師に比べ、救急救命士は学術的に研究をして発表をするというところはまだまだこれからの課題なのかなというような印象が私としてはあります。

脇田 ありがとうございます。続いて原さん、いかがですか。

原 僕が多くの方に読んでいただきたいところは2つ大きくあるんですけども、一つ目は、海外の論文の最新の知見の紹介です。元々医学は英語でどんどん進んでいくことが多いので、都度そのときに出ている最新の知見を日本語に翻訳して、救急救命士が解説をすることに興味をもっていただけるといいかなと思っています。

あと、別の企画のなかでは、それぞれ特筆すべき活動をしている団体の方とか個人の方をピックアップするところもあります。消防のなかで活躍されている方もそうですし、消防外でいろいろなことをされている方々のことを聞く機会というのは、たぶん普通に勤務をしている限り、なかなかないと思うので、そういった方々に、「救急救命士って何しているんだろう」「こういうことができるんだ」というところを見ていただけると非常にいいのかなと思っております。

脇田 海外の最新論文も載せていただけるようなお話もあるように聞いていますので、よろしくお願いします。

原 よろしくをお願いします。

脇田 さて続いて、一柳さんですかね。どんなところが売りですか。

一柳 ありがとうございます。この機関誌の目標とするところは、学術団体として出す学術雑誌ですけども、これまで学会員の皆さんに、会員としてのインセンティブというのがなかったんです。この雑誌自体は、価格が1,500円(税別)です。抄録集も含めて年4回会員の方には無料で配布されます。1冊コストが1,500円、それを年4回配ることになると、それだけでかなり元は取れるのではという側面があります。そしてそれだけの内容だと自信を

もって皆さんに提供できる雑誌であると思っています。

ですから、最初は消防の職場や病院、大学で回し読みだったとしても、「じゃあ僕もこの学会に入って、これを無料でもらおう」と考えていただけると、それが学会員の広がりにつながります。そのためにもしっかり作って継続していこうと思っています。

脇田 ありがとうございます。では、続いて木下さん、どうですか。

木下 先ほど根拠という話が出てきたと思うんですけども、「どここの病院の先生がこういうことを言っていたから」ではなくて、「『救急救命士ジャーナル』に載っていたからこうだね」みたいな話が出るととても面白いなと思いつつ皆さんの話を聞いていました。

引用している文献まで見てみたい、と思っていただけるような内容をうまく届けることができ、本当に「『救急救命士ジャーナル』に載っていてね」みたいな、皆さまのお手元に届いて話題となるような本になればいいかなと思って今お話を聞いておりました。

脇田 ありがとうございます。山内さん、よろしいですか。

山内 僕は、やはり先ほどお話ししたとおりで、しっかりと自分らの足で立って、理論や根拠をもって学ぶということが重要だと思いますので、ぜひ読んでいただきたいのは投稿論文ですね。とにかく救急救命士が執筆した、勉強したものを読んでもらいたい、そこが一番です。

もう一つは、私が司会をさせていただいたので手前味噌になりますけれども、大学院という一歩進んだ学びをした方々の座談会企画です。学ぶということがいかに重要か、を軸にした内容になっていると思います。実際に一歩進んだ学びを肌で感じた方々の声を聞いてもらいたいと考えています。ぜひその2つは読んでいただきたいと思います（本座談会はp.25に収載しています）。ぜひその2つは読んでもらいたいなと思っています。

脇田 ありがとうございます。最後になりましたが、編集委員長。企画はすべてよいということを編集委員長としてはお考えかと思いますが、「これだけは見てくれ」というのはありますか。

喜熨斗 会員にどう興味をもってもらえるか、なんですが、この雑誌全体として、すべて救急救命士が考えて、救急救命士が書いて作っている雑誌なんだ、というのが伝えられるかどうかポイントだと思います。そう考えると、いろいろなトピックスや連載関係も救急救命士が中心となって書いてもらうのですが、やっぱり研究の部分は非常に重要なポイントだと思います。

この将来的な目標といいますか、これは雑誌としてただ単に手に取ってもらっただけではなくて、「日本中の救急救命士はこんなことをやっているんだ」ということを知って

もらい「同じ救急救命士としてこういった人たちと一緒に何か活動したい」と思ってもらえるような雑誌にする必要があると思います。

もちろんこの雑誌は頑張らなければいけないのですが、雑誌だけではなくて、それと連動して、学会として活動をどう広げていくか、ほかの学会のように

救急救命士としていろいろな指針ですとか提言を出していく必要もあると思いますし、学術集会の内容も充実させていく必要があると思います。その第一歩として、この『救急救命士ジャーナル』が入り口となればと思っています。

脇田 ありがとうございます。喜熨斗編集委員長がおっしゃったように、日本病院前救急救命学会が他学会からも認められ、つながっていくというようなことをきくと私の次の世代の皆さんが確立されていくのではないかと思います。これぞ「自律」ですね。

救急救命士の職域の拡大について

脇田 さて、医師の働き方改革に伴って、救急救命士のほかにもそうですけれども、「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部を改正する法律案」が国会で審議可決されると、それに伴い令和3年10月1日から改正「救急救命士法」が施行されることになります。救急救命士制度が30年という節目で一つまた大きな変化があると思います。その辺についてどんなか何かお話をいただけますか。

山内 先ほどのお話と少々重複しますが、私自身は病院で教育を立ち上げつつ、二次と三次の救急初療をやってきました。私の場合は准看護師免許を保有していますから院内の処置も行えたわけですが、現状は救急救命士資格だけだと、極端な話、患者にタッチすらできないわけです。そこにはやはり何かできないかな、という思いは正直ありました。ただ、今回の法改正が単純に「救急救命士の数が多くてあふれているので病院で勤務させる」ための理屈だと履き違えてはいけないと思っています。それならば看護師免許を取ればよいだけのことになってしまいますし、国家資格としてあいまいなものになってしまいます。やはり「救急救命士」であることは絶対に忘れてはいけないことだと思います。

この法改正でわれわれが活動できるフィールドは間違いなく広がります。では、それをどのように活かしていくの



津波古 憲氏



原 貴大 氏

かというところを救急救命士全体で深く考えていかなければならないと感じています。私たちがプロフェッショナルであることを忘れずに救急救命士の職域をきちんと作り上げていく。本来であればこのこと自体を救急救命士が中心となって行っていかなければならないところですが、今回の法改正はそう言えないと思いますし、まだまだ救急救命士の「自律」は道半ばだと言わざるを得ないのかなと思います。今後、救急救命士自身がムーブメントを起こしていく必要があります。これからだと思います。

一柳 僕は消防に勤めだして、消防で救急救命士の資格を取って、現在も消防でしか働いてないのですが、やっぱり医療機関に病院実習に行くとき、どうしても消防の人間として、救急救命士の学習の一環、研修の一環として院内で働いているという感覚でしかないんです。多くの消防で働く救急救命士は多分そういう感覚で今まで過ごしてきたんだと思うんですけども、これからは医療チームの一員としてやっていくという意識が高まってくると予想されます。そのうえで、やっぱりプロフェッショナルとしての期待が、消防で働く救急救命士に対しても、どんどん高まり、今までとは全然違ってきます。

それは決してネガティブじゃなくて、われわれの医療従事者としてのステータスを絶対上げていくものだと思っていますので、本学会や『救急救命士ジャーナル』が、必ずその動きの支えになればなりません。

喜熨斗 法改正については、私としてはもちろん賛成ではあるのですが、一方で救急救命士が医療従事者として認知される重要なターニングポイントだとも思います。今まで消防機関を中心にして、主にプレホスピタルの現場で救急救命士が自分たちのフィールドを作っていき、そこで活動をしていました。例えばドクターカーやドクターヘリが来て、または DMAT で一緒に連携をしたとしても、基本的には消防機関の管轄、指揮下で活動をするというのが一般的だったと思うんですが、それが医療機関で医師・看護師、その他のメディカルスタッフと同様に働くとなると、やはりそこで自分たちのフィールドを確立していけるのかというところが一つ重要なポイントになると思います。だからこそ何度も出てきていますが、自律をしていく必要があるだろうと思います。

その1点としては、今まで「救急救命士法」では第44条第2項までしかなかったんですが、今回の法改正で、第44条第3項が新設されます。その内容については、医療

機関に勤務する救急救命士は、厚生労働省で定める研修を行わなければいけませんよ、という内容です。ただし、本条文に「誰」が行わなければならないということまでは書いてないんですね。そこは救急救命士がしっかりと救急救命士を育てて教育をすべきだと思いますし、院内で立ち上げるべきメディカルコントロール体制もルールや内容については、一緒に協議をするポジションにしっかり入っていく必要があると思います。そこが院内での自律というところでは重要な点かなと思います。

脇田 ありがとうございます。職域が広がるわけですが、学会としては一つの大きなポイントになりますね。

指導救命士の活用

脇田 それに関連して、ちょっと私は思うんですけども、その職域が拡大したことで指導救命士が活躍できないのかなと思っています。指導救命士について、どなたかお話いただけますか。

津波古 指導救命士は、今消防機関の制度でしかないと思いますが、私は、民間の救急救命士の制度においても指導救命士というのは必要だと思いますし、今後できていってほしいと思います。

消防機関で生涯教育を受けているときに感じたのが、2年間128時間を自分たちで学びたい内容を決めて学ぶというよりも、用意されたものを選んで勉強しているという印象が私はありました。

医療従事者としては、自分から進んでテキストを買って、学会に自ら参加して、自分の時間を使って知識や技術をアップデートしていくのが本来かなと思っており、消防機関ではまだまだ少ないと感じています。

ただ環境に甘んじるのではなく、自らが自律して学んでくことは、これからの救急救命士に絶対必要なところだと思います。そういった意味でも、民間でこれから働いていける救急救命士の数も多分増えていくと思いますので、消防機関だけの指導救命士制度ではなくて、民間においても指導救命士制度というのは必要になってくるかなと個人としては考えます。

一柳 認定基準のなかには、学会発表や論文投稿が一つの決まりとしてあると思うんですけども、現状、指導救命士の皆さんがよりどころにしている学会というのがなかなかないんですよね。そういう学会として日本病院前救急救命学会が寄り添っていった、「将来的には指導救命士は必ず日本病院前救急救命学会の会員である」というような、そういうステータスになればなと思っています。

脇田 ありがとうございます。ほかに皆さん、ないですか。

原 僕も病院で勤務をさせていただくこともあって、今回

の法改正について、病院の中の人、外の人、いろいろな方とお話をするんですけども、僕自身がすごく言われて悔しかったのは、「今回のこの法改正って救急救命士のためであって、あと働く時間を短くしたい医者のためであって、患者のためじゃないよね」という発言をやっぴりいただくんですね。それは確かに、「じゃあ、病院で救急救命士が働いて、救命率がどう上がるんだ？」と言われたら、僕もやっぱり説明はできなくて。

はたして、「救急救命士が病院で働ける」「そのほかの職域で働ける」ということが、本来の目的である「人の命を助ける」というところにどれほど力を尽くせるのかというところはやっぱり考えなければならないなと僕はすごく思っています。病院や民間のなかで救急救命士の価値を発揮して、その成績を上げていくためにも、やはりリーダーシップを取れる指導救命士のような人がそれぞれの病院、地域でいて、頑張らなきゃいけない。そういう時期がこれから来るのであって、「職域が増えるから、とりあえずそこに流れればいいや」という人が増えるのを僕は正直危惧をしているところではありますね。

脇田 単純に「本当に職域が広がりますよ、幸せですね」というような話ではなくて、そこに何ができるかとか、何をやっていこうかという視点がないと、さっき喜熨斗さんもおっしゃったように、単純に職域が拡大するだけで、中身が伴わなくなると思いますね。

喜熨斗 質問ですが、実際に消防機関では指導救命士ができあがっても何年も経つと思いますが、実際に消防機関のなかで指導救命士ができたことによっていろいろ変わった部分って感じるものなんでしょうか。

脇田 ある地域では変わりつつあるのかなという印象は受けました。地域によっては「まったく変わってないよね」という印象もあります。

過渡期ではあることには間違いないんですけども、大きく変わった地域もあれば変わらずにどうしたらいいのかって悩んでいる地域も多くある。こういったところを掘り下げていくといい企画記事になるのかなというふうに思うので、ぜひ取り上げていただけたらなと思っています。

表紙について

脇田 ところで、表紙って誰が作ったのか、何でこの表紙になったんですか？ お話をちょっといただけたらなと思うので、どなたに聞いたらいいですか。

喜熨斗 それは一柳さんに聞いて。

津波古 もうこれは一柳さんに聞くのが一番ですよ。

一柳 ありがとうございます、振っていただいて。この表紙の作成の話をいただいたときから、学会のコンセプトカ

ラーである空色——スカイブルーですね、これを基調としたデザインにしようと決めていました。スカイブルーですから、やっぱり空だろうと。空の雲を撮るだけでは、うーんという感じなので、やっぱり医学に携わる者としては血液を象徴できるような真っ赤なものを何か空に浮かべようと思ひまして、ちょっと娘の協力を得まして、4~5m ぐらいあるチュールというふわふわの布を借りて、釣り竿の先っぽに付けて、近所の公園で振り回してそれを撮ったという経緯です。

娘がシャッターを切りまして、400 枚ぐらい撮って、私は時間にすると 40 分ぐらいずっと竿を振り回していたんですけども、使えるのはそのうち 50 枚ぐらいはありますので、1 年、通年のデザインとして 1 枚使っていったら、向こう 10 年ぐらいネタには困らない写真の材料になっています。皆さんに親しんでいただけたらなと思っています。

脇田 ありがとうございます。私はてっきり、空の写真を撮って、そこへ何か素材をもってきて貼り付けたのかなというふうに思っていました。

一柳 実際振りました。

脇田 家族でこの表紙を作っていただいたというのは、後世に伝えていっていただけたらなと思います。

おわりに

脇田 JPTEC 協議会のほうからの発信もこの雑誌にいただけることになっております。木下さん、何か一言、これについてよろしく願いをします。

木下 先ほど、私からの『救急救命士ジャーナル』の一押しのところでも一度ご説明させていただきましたが、JPTEC 協議会としても、ある意味では JPTEC 協議会をコマーシャルする場が今まであまりなかったというところもありまして、JPTEC 協議会としても大変ありがたいお話だと考えておりますので、うまく最新の知見を紹介するとともに、JPTEC の広がりにより貢献できればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

脇田 そうですね。とくに病院前のことを JPTEC はやっていますから、そこも外傷の学問について、きっと投稿されたりすることがあるのかなと思います。

最後に編集委員長、何かありますでしょうか。

喜熨斗 本当は最初にお話をすべきところでしたが、



山内 一 氏



脇田 佳典 氏 (司会)

元々、救急救命士の学会として論文が投稿できる場と、それを掲載する雑誌を作らなければいけないというのは最初からずっと言っていたのですが、なかなかそれが形にできていなかったというのが実際のところでした。

おそらくこのような状況がなければ、ずっとまだ悩んでいる時間が続いていたんだろうと思いますが、今回へるす出版さんから最初の後押しをしてもらって、このような雑誌を刊行するということにつながっていききました。

期待していただいてこのようなきっかけをいただいていますので、成功を絶対させるしかないというところで、これが、多くの救急救命士、またそれ以外にもかかる多くのメディカルスタッフの方たちにも見ていただける

雑誌にしていきたいと思います。

そのためには多くの企業の方々にもご協力をいただきながら進めていきたいと思いますので、ぜひご協力のほどよろしくお願いしたいと思います。

脇田 ありがとうございました。最後に編集委員長のほうからおまとめいただきましたので、もうこれ以上言うことは基本的にはないんですけども、この『救急救命士ジャーナル』が、たくさんの人に入会してもらう動機となるようなものになること、それと、救急救命士に向けた情報発信の専門誌として皆さんが目指すということを本日のお話で伺ったというところがございます。救急救命士が自然に手に取って、「さらにもっともっと読もう」、親しみやすいジャーナルでありながら「でも専門性が非常に高いよね」と言われるような雑誌ができることを私も願っておりますので、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

令和3年3月8日 Zoomにて

